

千葉県八千代市

高津新田遺跡 e 地点・
高津新田野馬堀遺跡 m 地点

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成27年度

内田正勝・株式会社アーネストワン

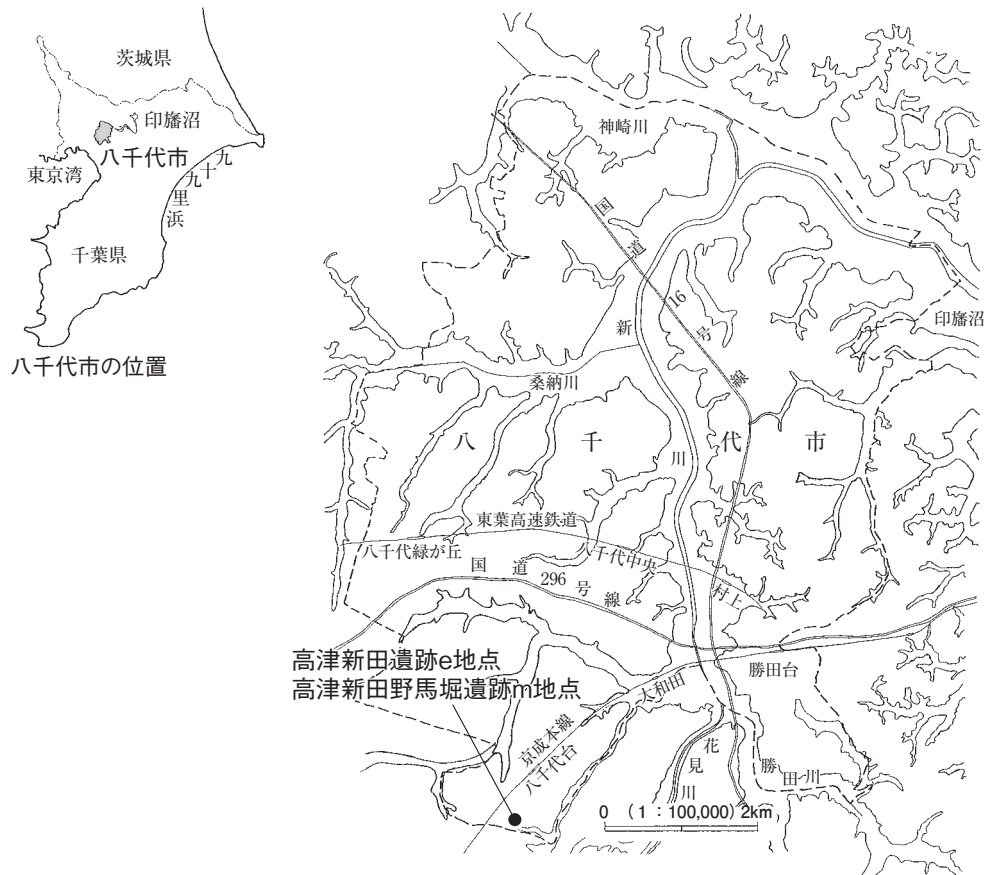
八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成27年度民間開発等埋蔵文化財発掘調査事業として実施した発掘調査の報告書である。
2. 本書に収録した発掘調査は、宅地造成に伴うもので、事業者である内田正勝氏及び株式会社アーネストワンの委託を受けて実施した。
3. 遺跡名は、高津新田遺跡 e 地点及び高津新田野馬堀遺跡 m 地点、所在地は、千葉県八千代市八千代台南二丁目1番77, 18番1, 19番である。
4. 調査及び整理は、以下のとおり実施した。

確認調査 国庫補助, 県費補助を受け, 平成27年度市内遺跡調査事業として実施した。
期間 平成27年5月26日～6月3日 面積118㎡/1,231.36㎡
本調査 期間 平成27年6月23日～7月16日 面積285㎡
本整理 期間 平成27年9月1日～平成28年3月31日
5. 報告書及び文献一覧は、第1章末にある。
6. 遺構Noは、数字と記号（アルファベット）の組合せで表記した。記号は以下のとおりである。

堀跡・溝跡 M 土坑 P
7. 出土した遺物のほか、写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
8. 本書の図版作成は、常松成人・山下千代子が行い、遺物の写真撮影・編集・執筆は常松が担当した。
9. 本書の作成に際し、白井市教育委員会の高花宏行氏にご協力をいただきました。記して謝意を表します。



高津新田遺跡 e 地点・高津新田野馬堀遺跡 m 地点位置図

目次

凡例

目次 挿図目次 表目次 写真図版目次

第1章 調査経過及び概要	第3章 成果と課題
第1節 調査に至る経緯	写真図版
第2節 調査の概要	報告書抄録
第3節 遺跡の概要	
第2章 検出された遺構と遺物	
第1節 高津新田遺跡 e 地点	
第2節 高津新田野馬堀遺跡 m 地点	

挿図目次

第1図 遺跡周辺の地形	第9図 2 M野馬堀 B 区実測図
第2図 確認調査の結果	第10図 2 M野馬堀出土遺物
第3図 各調査地点	第11図 1 M溝跡実測図
第4図 調査区全体図	第12図 1 M溝跡出土遺物
第5図 m地点 (2区) 全体図	第13図 1 P土坑実測図
第6図 e地点 1 P土坑実測図	第14図 1 P土坑出土遺物
第7図 e地点採集遺物	第15図 m地点その他の出土遺物
第8図 2 M野馬堀 A 区・2 P土坑実測図	

表目次

第1表 高津新田遺跡各調査地点の概要	第9表 2 M野馬堀出土遺物観察表
第2表 高津新田野馬堀遺跡各調査地点の概要	第10表 m地点 1 M溝跡土層
第3表 測量成果	第11表 1 M溝跡出土遺物観察表
第4表 e地点 1 P土坑土層	第12表 1 P土坑出土遺物観察表
第5表 e地点遺物観察表	第13表 m地点 1 P土坑土層
第6表 m地点 2 M野馬堀 A 区土層	第14表 m地点その他の出土遺物観察表
第7表 m地点 2 P土坑土層	
第8表 m地点 2 M野馬堀 B 区土層	

写真図版目次

図版1 高津新田遺跡 e 地点・高津新田野馬堀遺跡 m 地点
図版2 高津新田野馬堀遺跡 m 地点
図版3 高津新田野馬堀遺跡 m 地点・出土遺物

第1章 調査経過及び概要

第1節 調査に至る経緯

八千代市は、昭和42年の市制施行以来、緑豊かな環境と首都近郊30km圏という立地条件のもと、発展を続けている。開発著しい本市にあって、八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）は、民間開発等の事業に伴い、開発事業者が埋蔵文化財の調査費用を負担する案件に対処するため、「八千代市埋蔵文化財発掘調査受託要綱」（平成19年3月30日告示第37号、以下「受託要綱」という。）を制定し、平成19年度から「民間開発等埋蔵文化財調査事業」を実施している。本書は、平成27年度における当該事業の報告書である。

平成27年4月15日、株式会社アーネストワン代表取締役松林重行氏（以下「事業者」という。）から八千代台南二丁目の宅地造成事業に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の依頼が提出された。確認地は、周知の遺跡である高津新田遺跡及び高津新田野馬堀遺跡を含む範囲であり、隣地での調査結果から、少なくとも野馬堀が検出される可能性が高いと判断された。このため、市教委は、同月「周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、文化財保護法（以下「法」という。）第93条に基づく届出が必要」であることと、「その取扱いについて協議したい」旨を回答し、全域1,231.36㎡について取扱いに係る協議を行った。その結果、事業者は工事を進めたいとのことであり、発掘調査を行うこととなった。同月、事業者から土木工事の届が提出されたので、市教委はこれを同年5月11日付け教総（文）第144号で千葉県教育委員会（以下「県教委」という。）に進達した。県教委からは、同年5月18日付け教文第4号の150で、事業者に対し発掘調査を実施するよう通知があったので、市教委は同年5月19日付けでこれを事業者に送付した。土地所有者の内田正勝氏（以下「所有者」という。）からは、既に同年4月27日付けで発掘調査承諾書が提出されており、準備が整った5月26日に確認調査を開始した。

確認調査 確認調査は、平成27年度の市内遺跡調査事業として国庫及び県費の補助を受けて行った。対象面積1,231.36㎡のうち118㎡を掘削し調査した。その結果、市道八千代台南42号線に沿って野馬堀を含む近世溝跡2条、北側斜面部に縄文時代と見られる土坑1基を検出した。遺物は、野馬堀周辺から近世陶磁器が出土したが、北側の土坑周辺では遺物は出土しなかった。

本調査 確認調査の結果、近世溝跡2条、縄文時代土坑1基、面積計285㎡を協議範囲とした。本調査実施に向けて協議を重ね、市教委は、受託要綱に基づき、以下の手続きを進めた。同年6月9日付けで調査費の見積りを事業者・所有者に提示した。事業者・所有者から6月14日付けで、八千代市長（以下「市」という。）に対し調査依頼書が提出されたため、市は6月16日付けでこれを受託し、6月19日付けで市・市教委・事業者・所有者の四者間で埋蔵文化財の保存措置に関する協定を締結した。これを受けて同日付けで市と事業者・所有者間で本調査の委託契約を締結し、6月23日に市教委が本調査を開始した。

第2節 調査の概要

本調査は、1区＝北側部分＝高津新田遺跡 e 地点＝土坑1基15㎡、2区＝南側部分＝高津新田野馬堀遺跡 m 地点＝近世溝跡2条270㎡を対象として行った。調査区設定後、重機で表土除去を行い、基準点測量を実施（委託作業）し、その成果を元に光波測距儀で測量を行った。遺構調査は2区から開始し、野馬堀（2M遺構）にトレンチを2箇所（A区・B区）設定して掘削し、土層及び堀の形状を調査した。また、

深さ2mを越える1P土坑を検出し調査した。併せて1M溝跡や2P土坑等の調査を進めた。2区の調査が一段落したところで、1区の調査に着手し、e地点1P土坑を調査・記録した。その後2区の遺構測量等を行い、終了後、重機で埋め戻しを行った。

調査経過は、6月23日機材搬入・調査区設定、24日～25日重機表土除去作業、25日～26日清掃遺構検出作業、26日基準点測量、杭打ち（委託作業）、遺構検出状況写真撮影。29日2区遺構調査開始、調査区等測量。30日2MA区掘削、分層。7月2日～14日2区各遺構調査、写真撮影、実測等。9日・10日1区1P土坑調査。14日機材撤収開始。15日・16日重機による埋め戻しを行い、全調査を終了した。

第3節 遺跡の概要

高津新田遺跡 高津新田遺跡は、市域の南西部、八千代台南地区にある。足^{あし}（芦・葦）太谷津^{ぶと}の奥部を東～南に臨む台地上、標高18m～26mに立地する。

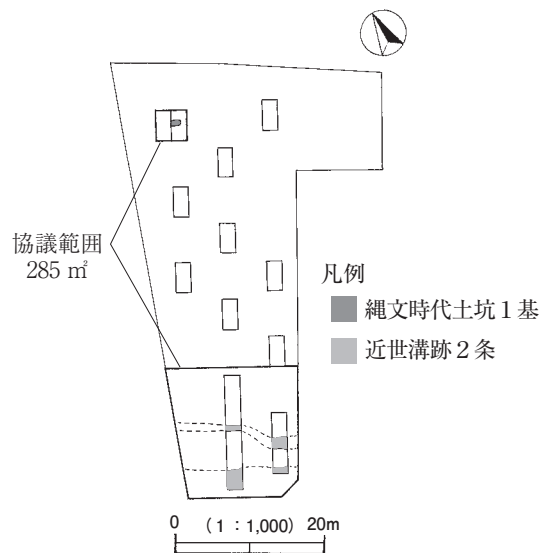
本遺跡は、昭和58年の埋蔵文化財包蔵地所在報告書の中で、遺跡No.250高津新田遺跡、歴史時代(国分)の包含地として初めて登録された。同時に、北に隣接する遺跡No.249八千代台南遺跡も、歴史時代(国分)の包含地として初めて登録され、西に隣接するNo.251高津新田野馬堀遺跡も、江戸時代の空堀・土手として初めて登録された。

平成9年の千葉県遺跡地図改訂版で、八千代台南遺跡・高津新田野馬堀遺跡は高津新田遺跡に統合された。しかし、市教委としては、高津新田野馬堀遺跡は、高津新田遺跡の範囲を大きく越えて続いているため、高津新田遺跡とは別に扱っている。

調査歴については、第1表にまとめた。特筆されるのは、a地点の調査で縄文時代早期撚糸文期の竪穴



第1図 遺跡周辺の地形



第2図 確認調査の結果

建物跡1棟を検出したことである。縄文時代についてまとめると、遺構としては、他に土坑が見られるのみである。遺物は、高津新田野馬堀遺跡の調査結果も合わせると、早期撚糸文、前期関山式、後期堀之内式・安行1式及び磨石、石鏃が得られている。

本遺跡の畑地には、かつて泥面子の類が多量散布していたが、現在そのほとんどが住宅街に変貌をとげている。

なお、a地点の調査の際、当該地周辺の地名が「大請」であることを地元の方から伺ったため、「大請遺跡」と称したことがあるが、「高津新田遺跡 a 地点」として取り扱って行く。

今回のe地点本調査においては、確認調査で検出した、開発区域北部の土坑1基をこれに属する遺構として取り扱った。

高津新田野馬堀遺跡 八千代市の江戸時代を語るときに、幕府の直轄牧の一部に関わりがあることは欠かせない項目のひとつである。江戸幕府直轄牧は、下総の小金牧・佐倉牧、安房の嶺岡牧、駿河の愛鷹牧の4牧である。小金牧は、高田台牧・上野牧・中野牧・下野牧・印西牧の5牧から成り、このうちの下野牧が、八千代市域の大和田新田・高津・高津新田に接していた。北西～南東に長い下野牧の南東端部に当たる。この牧の遺構である野馬土手・野馬堀の一部が認識され、昭和58年の埋蔵文化財包蔵地所在報告書の中で、遺跡No.251高津新田野馬堀遺跡（江戸時代の空堀・土手）として初めて登録された。市域の南西端部、千葉市との境を走る市道八千代台南42号線に沿って存在し、京成本線をまたいで西は県道幕張八千代線付近まで認められている。

調査は頻繁に行われており、第2表にまとめた。

今回のm地点本調査においては、開発区域南部の調査区の遺構群がこれに属するものとして取り扱った。

野馬土手説明板 今回の開発区域に接する市道八千代台南42号線上に、市教委が昭和62年3月31日付けで設置した「野馬土手」説明板があった（第4図）。設置当時は野馬土手が存在していたが、現在はほぼ



第3図 各調査地点

第1表 高津新田遺跡各調査地点の概要

地点名	調査面積 (㎡)	遺構	遺物	報告書※
a	確認・本調査 489 / 4,297	縄文時代竪穴建物跡 1 棟	縄文土器 (早期撚糸文)、石鏃	未刊
b	確認調査 690 / 4,336	近世野馬土手 1 条、 野馬堀 2 条、溝跡 1 条 本調査は、高津新田野馬堀遺跡 h 地点として実施	近世泥面子、陶器	八千代市教育委員会 2000 年
c	確認調査 1,436 / 12,681 本調査 12	縄文時代土坑 1 基、 近世溝跡 3 条	縄文土器 (後期安行 1 式)、磨石 近世陶磁器、泥面子	八千代市教育委員会 2008 年
d	確認調査 278 / 2,955.85	近世野馬堀 2 条 本調査は、高津新田野馬堀遺跡 k 地点として実施	近世陶磁器	八千代市教育委員会 2013 年
e	確認調査 118 / 1,231.36 本調査 15 / 285	縄文時代土坑 1 基	なし	本書

※ 5 ページの一覧を参照されたい。

第2表 高津新田野馬堀遺跡各調査地点の概要

地点名	調査面積 (㎡)	遺構	遺物	報告書※
a	確認調査 6,700 「八千代台 中東遺跡」として調査	比較的新しい掘り込み 本調査	土師器、カワラケカ	未刊
b	本調査 163	近世野馬堀 2 条	近世陶磁器、砥石、泥面子	八千代市遺跡調査会 1999 年
c	調査せず 1,617.99	—	—	—
d	確認調査 95 / 1,090	近世野馬堀 3 条	なし	八千代市教育委員会 1991 年
e	確認調査 40 / 1,054	近世野馬土手 1 条、 野馬堀 1 条	なし	八千代市教育委員会 1993 年
f	確認・本調査 489 / 4,297	近世野馬土手、野馬堀	陶磁器、泥面子	未刊
g	確認 500 / 1,585.65 本調査 18.4	近世野馬堀 1 条、土坑 1 基	近世・近代陶磁器	八千代市教育委員会 2002 年 b
h	本調査 158 / 750	近世野馬土手、野馬堀	近世・近代陶器、磁器、土器、瓦、泥面子、焼成粘土塊、文久永宝、鉄製品、鉄滓、おはじき、砥石、碁石、ロウ石、鏝、貝、搔器 (旧石器)、縄文土器 (前期関山式、後期堀之内式)	八千代市遺跡調査会 2007 年
i	確認・本調査 36 / 208	近世野馬堀 2 条	近世・近代陶器、磁器、泥面子	八千代市教育委員会 2002 年 a
j	確認調査 106 / 1,080	近世野馬堀 1 条	近世・近代陶磁器	八千代市教育委員会 2012 年
k	本調査 59 / 629	近世野馬堀 2 条	近世・近代陶磁器	未刊
l	確認調査 144 / 1,382	近世溝跡 3 条	近世・近代陶磁器	未刊
	本調査 116 / 1,382	近世溝跡 3 条	近世・近代陶磁器	未刊
m	確認調査 118 / 1,231.36 本調査 270 / 285	近世野馬堀 1 条、溝跡 1 条、 陥穴 1 基、土坑 1 基	近世・近代陶磁器、土器、瓦、縄文時代石鏃	本書

※ 5 ページの一覧を参照されたい。

消滅し、第3図に示した高津新田野馬堀遺跡b地点と同遺跡e地点との間の畑地に見える南側道路との間の斜面に、その痕跡を留めるのみとなっている。説明板が、かつて存在した野馬土手を伝えるものではあったが、内容的に現状とは合致しないものとなっていた。今回の開発工事に伴い、所有者から撤去の要望があり、また説明板も脚部の劣化により倒壊の危険性があったことから、平成27年7月7日付けで撤去した。

報告書及び参考文献一覧

八千代市教育委員会（1983年）『八千代の遺跡—千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書—』

原令子・藤原恵美子（1987年）「八千代市の野馬除土手」（『史談八千代』12 特集・野馬除土手

八千代市教育委員会（1991年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成2年度』（野馬堀d地点）

八千代市教育委員会（1993年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成4年度』（野馬堀e地点）

八千代市史編さん委員会（1994年）『八千代市の歴史 資料編 近世Ⅱ』

(財)千葉県文化財センター（1997年）『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）—東葛飾・印旛地区（改訂版）—』

八千代市遺跡調査会（1999年）『千葉県八千代市高津新田野馬堀—埋蔵文化財発掘調査報告書—』（野馬堀b地点）

八千代市教育委員会（2000年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』（高津新田遺跡b地点）

八千代市教育委員会（2002年a）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』（野馬堀i地点）

八千代市教育委員会（2002年b）『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書Ⅰ 金塚所在塚・萱田町川崎山遺跡b地点・高津新田野馬堀遺跡・尾崎群集塚・神久保寺台遺跡・稲荷前遺跡』（野馬堀g地点）

八千代市遺跡調査会（2007年）『千葉県八千代市高津新田野馬堀遺跡h地点—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』（野馬堀h地点）

八千代市教育委員会（2008年）『千葉県八千代市逆水遺跡f地点 北裏畑遺跡b地点 高津新田遺跡c地点 西山遺跡b地点 西山遺跡c地点 内野遺跡b地点 役山遺跡a地点 川崎山遺跡k地点 ヲサル山南遺跡b地点—不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ—』（高津新田遺跡c地点）

八千代市史編さん委員会（2008年）『八千代市の歴史 通史編 上』

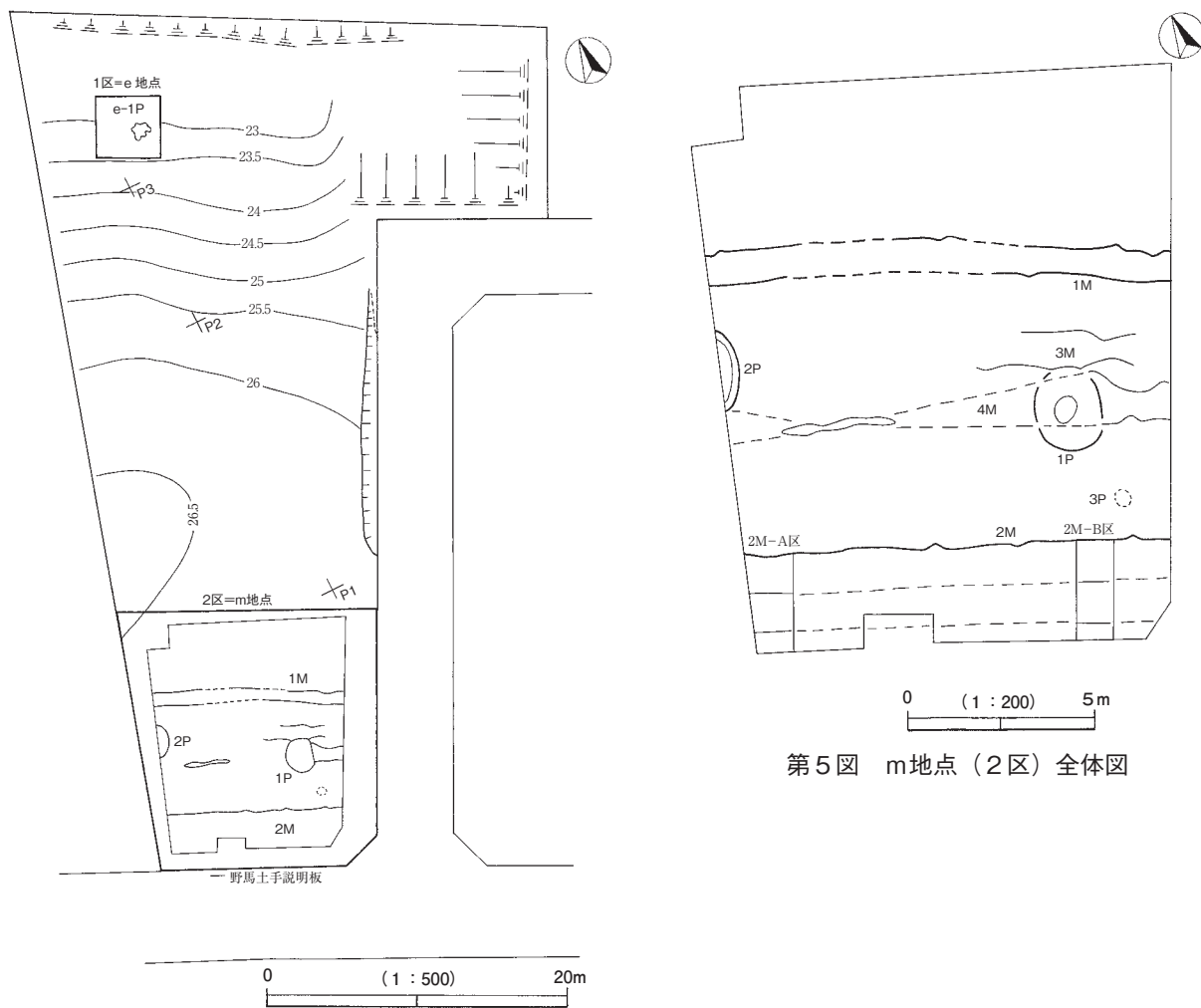
八千代市教育委員会（2012年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成23年度』（野馬堀j地点）

八千代市教育委員会（2013年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成24年度』（高津新田遺跡d地点）

第2章 検出された遺構と遺物

高津新田遺跡 e 地点（1区）では、遺構として土坑1基（e 地点1 P土坑）が検出され、調査した。遺構に伴う遺物は無く、表土から近世～近代のすり鉢片1点を採集した。

高津新田野馬堀遺跡 m 地点（2区）では、遺構として野馬堀1条（2 M野馬堀）、溝跡1条（1 M溝跡）、土坑2基（1 P土坑・2 P土坑）を検出し、調査した。他に、近代以降のため遺構として取り扱わないが、3 M溝跡・4 M溝跡があった。また、3 Pは攪乱の類であった。遺物は、近世陶磁器、瓦等が出土した。これらについて以下に報告する。



第4図 調査区全体図

第5図 m地点（2区）全体図

第3表 測量成果

(単位：m)

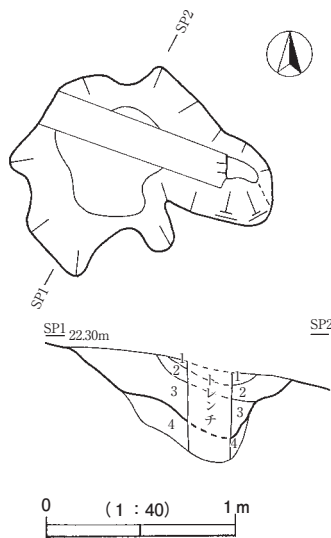
杭No	X座標	Y座標	標高
P 1	- 33,976.0	23,352.0	26.388
P 2	- 33,956.0	23,352.0	25.718
P 3	- 33,946.0	23,352.0	23.918

第1節 高津新田遺跡 e 地点

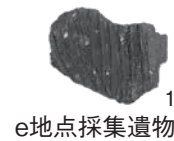
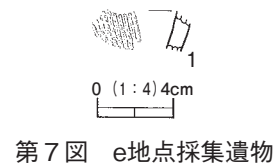
e 地点 1 P 土坑

立地 今回の開発区の北側は、足太谷津から西に入る小谷である。この小谷に臨む斜面に立地する。地表面の標高は23.0m～23.5m、遺構確認面の標高は22.0m～22.2mである。平面形態 不整形。底面形態 不整形で段差がある。**規模** 南北方向0.76m～1.07m×東西方向1.17m～1.40m、深さ21cm～34cm。覆土 第4表のとおり。3層に分かれる。上層に焼土粒子をごく少量含む。出土遺物 なし。

考察 不整形の土坑であり、複数の土坑の重複にも見えるが、明確には捉えられなかった。当初、覆土に焼土が含まれることから炉穴の可能性を考えたが、全掘しても焼土の量はごく微量に留まり、炉穴とは考えられない。遺物も無く、時期決定も困難であるが、本遺跡の調査歴を勘案して、縄文時代(早期、前期、後期のいずれか)に属するものと捉えておきたい。



第6図 e地点1P土坑実測図



第4表 e 地点 1 P 土坑土層

No	色		緻密度	その他
1	7.5YR 3/2～3/3	黒褐色土～暗褐色土	16	焼土粒子ごく少量含む。
2	7.5YR 3/3～4/3	暗褐色土～褐色土	24	しまり強い。
3	7.5YR 4/3	褐色土	15～18	ローム粒子・ロームブロックまばらに含む。
4	7.5YR 5/4	にぶい褐色粘土	15	茶褐色土(鉄分)含む。掘りすぎ部分。

第5表 e 地点遺物観察表

No	出土地点	種類・器形	状態・部位	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	1区表土	土器・すり鉢	胴部	30×21, 厚さ8	○石英・長石の細礫, 粗砂 ●(内) 橙褐色 (外) 橙色	内) 2mm間隔のすり目。 外) ナデ	

第2節 高津新田野馬堀遺跡m地点

2M野馬堀

位置 調査区の南端，市道八千代台南42号線沿いに検出された。規模 遺構確認面は，ローム漸移層～ソフトローム層で，攪乱が認められたが，プランは明瞭であった。調査区内での長さは11.3m，幅は市道側が不明のため2.7m以上である。調査は2箇所トレンチを入れて行った。調査区西端をA区，東側をB区とした。

A区 計測値 上端幅は，市道側が不明であるため，検出できた部分で2.7mである。中段は1.95m，底面は1.06m。深さは地表下2.6m，検出面下2.28m，底面の標高は24.20m。覆土 第6表のとおり。地表下1.16mまで現代ゴミを含む埋土が見られる。B区も同様であり，道路面から約1m低い窪地であった昭和50～60年代にゴミが投棄されていたものであろう。検出面下1.5mのところ、ややしまりのよい9の土があり，特徴的である。出土遺物 瓦1点。

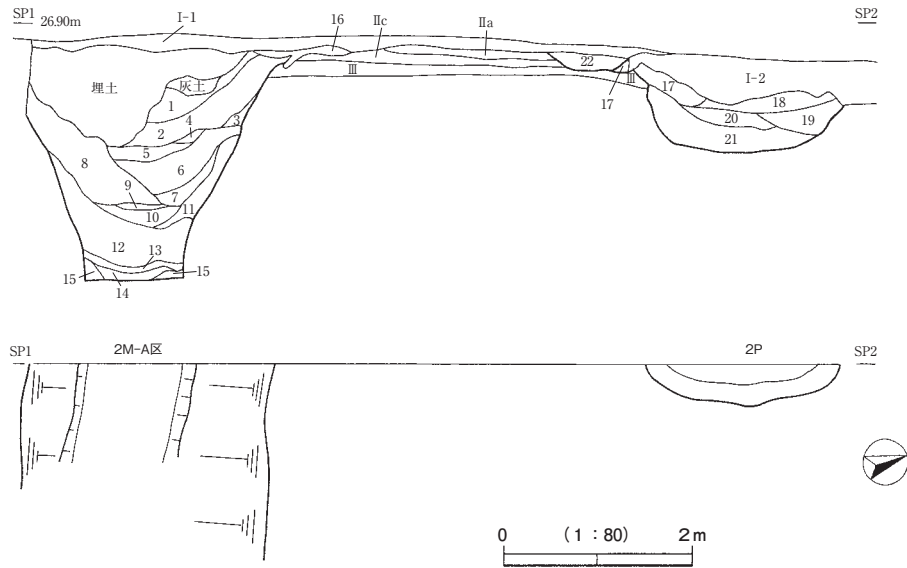
B区 計測値 上端幅は，市道側が不明であるため，検出できた部分で2.6mである。中段は1.97m，底面は1.0m。深さは検出面下2.3m，底面の標高は24.06m。覆土 第8表のとおり。検出面下0.9mまで現代ゴミを含む埋土が見られる。A区の9のようなしまりの変化は認識されなかった。出土遺物 瓦3点，土器1点。

考察 高津新田における牧に伴う野馬土手（野馬除土手）は，南側（牧の内側）に低い土手があり，堀を挟んで北（牧の外側）に高い土手があったことが記録されている。本遺構は，この二重土手の間に存在した野馬堀と考えられる。遺跡全体を東から調査地点ごとに見ると，h地点の「2号溝」，e地点の「堀」，b地点の「南側溝」，g地点の「堀01・02」，d地点の「1号堀」，j地点の「野馬堀」がこの堀に相当するものである。短軸断面が逆台形で，土手と対になって牧の内と外を明確に分けるものであり，野馬が牧外に出してしまうのを防ぐのに有効な堀であったと想像されるものである。

底面からの立ち上がりが垂直に近く，丁寧に掘られているという印象を受ける。また，深さが検出面から2mを越えているのは，b地点では認められるが，d地点・g地点・h地点・j地点に比べて深い。丁寧かつ大規模に造られているということになる。

A区のややしまりのよい9の土は，ある程度埋まった後に掘り返しを行った時の底面に当たるのではないかと推測する。風雨によって土手が崩れて堀に泥が流れ込むことは頻繁であったと想像され，堀の維持管理として清掃は必須であったと考えられる。しかし長期間放置したり，大規模台風などによって堀が埋まってしまうような事態があったとき，m地点A区のように堀の覆土内での掘り返しで済む場合と，g地点・h地点などのように位置をずらして掘ることにより堀の切り合いとして残る場合もあったのではないかと考えられる。なおb地点・d地点では，切り合いや掘り返しは認められていない。

遺物については，A区・B区とも少なく計5点である。瓦片が主たる遺物である。h地点でも野馬堀である2号溝から瓦片61点が出土しているが，平瓦のみのものであり，第10図2のような有段式丸瓦の出土は珍しいものである。



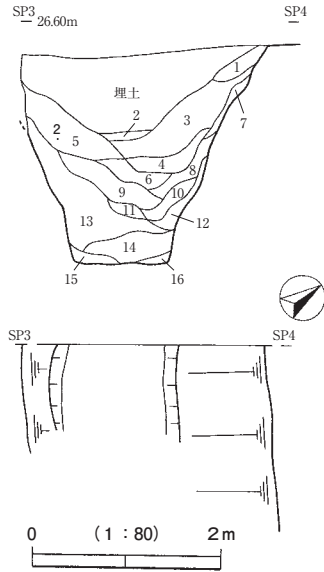
第8図 2M野馬堀A区・2P土坑実測図

第6表 m地点2M野馬堀A区土層

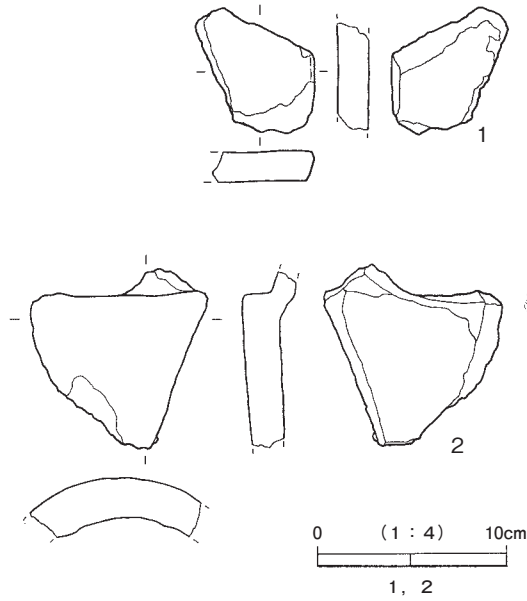
No	色		緻密度	その他
1	7.5YR 3/2	黒褐色土	14～18	ロームブロック・ローム粒子を含む。
2	7.5YR 3/2	黒褐色土	12～15	ロームブロック・ローム粒子を含む。1より少ない。
3	7.5YR 3/2・4/3・4/4	黒褐色土・褐色土	11	混じり合った土。
4	7.5YR 3/2	黒褐色土	13	ローム粒子を多量含む。
5	7.5YR 3/2	黒褐色土	13	ローム粒子を少量含む。
6	7.5YR 3/2	黒褐色土	12	ローム粒子・ロームブロックが所々に集中する。
7	7.5YR 3/2	黒褐色土	13	ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
8	7.5YR 3/3	暗褐色土	9～12	ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
9	7.5YR 3/3	暗褐色土	17	8に似るが、ややしまりが良い。
10	7.5YR 3/4	暗褐色土	12	ローム粒子・ロームブロックを含む。
11	7.5YR 4/3・4/4	褐色土	11～16	暗褐色土混じり。ローム土・ローム粒子を多量含む。
12	7.5YR 4/4・4/3	褐色土	13	ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
13	7.5YR 3/4	暗褐色土	14	ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
14	7.5YR 4/4	褐色土	16	ローム土を主体とする。しまり良い。
15	7.5YR 4/3	褐色土	8	しまり弱い。
16	7.5YR 3/3～3/2	暗褐色～黒褐色土	17～19	攪乱か。

第7表 m地点2P土坑土層

No	色		緻密度	その他
I-1				表土 碎石まじり。
I-2				表土 攪乱された土。
II a	7.5YR 3/2	黒褐色土	23	腐植堆積土層
II c	7.5YR 4/3・4/4	褐色土	20	ローム漸移層
III	7.5YR 4/4	褐色土	17	ソフトローム層
17	7.5YR 3/2	黒褐色土	17	ローム粒子をまばらに含む。
18	7.5YR 3/2.5	黒褐色～暗褐色土	20～22	ローム粒子1より多く、ロームブロックをまばらに含む。
19	7.5YR 4/3	褐色土	19～20	ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
20	7.5YR 4/3・4/4	褐色土	17～20	ローム質の土。
21	7.5YR 4/4	褐色土	16～17	ロームブロックを多量含む。
22	7.5YR 3/3	暗褐色土		4M覆土 ロームまじり。



第9図 2M野馬堀B区実測図



第10図 2M野馬堀出土遺物

第8表 m地点2M野馬堀B区土層

No	色		緻密度	その他
1	7.5YR 3/2 ~ 3/3	黒褐色～暗褐色土	17	ローム土・ロームブロックを含む。
2	7.5YR 3/2	黒褐色土	14	黒色味強い。ローム粒子を少量含む。
3	7.5YR 3/2	黒褐色土	14～16	ローム粒子をまばらに含む。
4	7.5YR 3/2	黒褐色土	13～15	3より黒い。ローム粒子を3より多く含む。
5	7.5YR 3/3	暗褐色土	12～15	ローム粒子を多量含む。ポロポロした感触。
6	7.5YR 3/3・4/3	暗褐色土・褐色土	16	ローム粒子をまばらに含む。
7	7.5YR 4/3	褐色土	15～17	ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
8	7.5YR 3/3・4/3	暗褐色土・褐色土	12～15	ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
9	7.5YR 4/3・3/3	褐色土・暗褐色土	11～14	ローム粒子を含む。
10	7.5YR 3/3・4/3	暗褐色土・褐色土	14～17	ローム粒子を多量含む。
11	7.5YR 4/3・4/4	褐色土	18	ローム質の土。ロームブロックを含む。
12	7.5YR 4/3・4/4	褐色土	13～17	ローム質の土。壁の崩落土。
13	7.5YR 4/4・4/3	褐色土	13～16	ローム粒子・ロームブロックを多量含む。ポロポロした感触。
14	7.5YR 4/4	褐色土	16～18	ローム質の土。ローム土を主体とする。
15	7.5YR 4/3・4/4	褐色土	12	ローム混じり。しまり弱い。
16	7.5YR 3/3・4/3・4/4	暗褐色土・褐色土	10	暗褐色土・ローム混じり。しまり弱い。

第9表 2M野馬堀出土遺物観察表

No	出土地点	種類・器形	状態・部位	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	2MA区	平瓦 いぶし瓦	端部	66×63. 厚さ 16.5	○細砂 ●灰色, 灰白色	扁平	
2	2MB区 2M-1	有段式丸瓦 いぶし瓦	尻部, 玉縁の一部が残る	92.5×93. 厚さ 11～22	○暗褐色粒子, 小礫 ●内) 灰黒色, 灰白色 外) 黒色, 灰銀色	内) 窪みあり。 外) 平滑。銀色を帯びる。	

1 M溝跡

位置 2区の中央北寄りに存在する。2M野馬堀と平行する位置関係にあり、6.7m～7.3mの間隔がある。

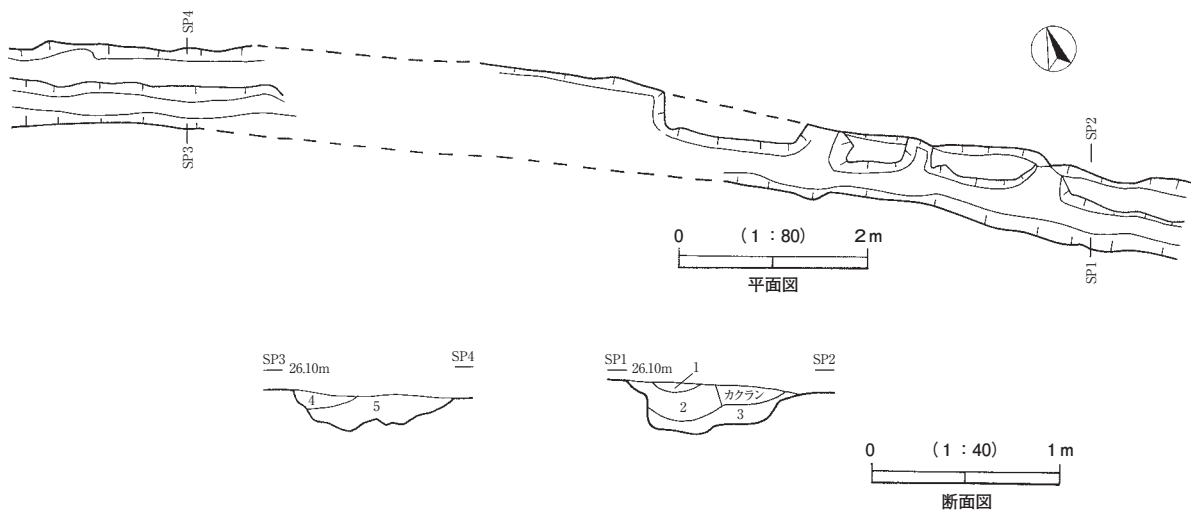
規模 攪乱が激しくプランの確定にも困難が伴い、確認調査時には、屈曲していると捉えていた。本調査においても、当初の清掃検出時には、明確に捉えきれず、全掘しつづ確定させた。複雑な形状になっているのは、主に攪乱の影響である。破壊されている部分が多いが、北東側が浅く南西側が深くなる、有段の溝と考えられる。調査区内での長さは12.5m、幅は0.65m～1.0m、深さは14cm～26cmである。覆土 東端付近と西端付近で土層を観察した。第10表のとおり。

出土遺物 土器1点、陶器1点、瓦2点、石鏃1点。

考察 本遺構と2M野馬堀との間の幅約7mの地帯に野馬土手が存在したと考えられる。二重土手の大規模な方の土手になる。この大土手の北側に存在する溝跡は、遺跡の東からh地点の「1号溝」、b地点の「北側溝」、d地点の「2号堀・3号堀」があり、本遺構はこれらにつながるものであろう。この溝も野馬堀と同様に複数の溝跡が切り合う状況を呈することが多く、m地点のように1条に見える例は少ない。しかし、攪乱が激しいため捉えられなかった可能性もある。

深い野馬堀に比べると明らかに浅く、野馬の移動を防ぐ機能は想定できない。また検出されない地点もあるため、断続的なものと見られる。しかし、野馬堀・野馬土手に概ね平行して存在し、大土手の北側を規定するように走る溝跡として、何らかの関係性を持つものと捉えておきたい。

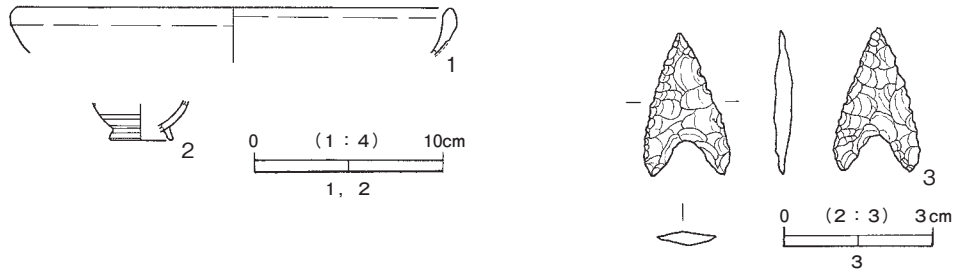
遺物は、2M野馬堀と同様少なく、2点の瓦片が主たる遺物と言える。西部で出土した石鏃は、本遺構とは直接的に関わらないが、高津新田遺跡での知見と合わせて、縄文時代における土地利用を考えるうえで、参考となる遺物である。



第11図 1 M溝跡実測図

第10表 m地点1 M溝跡土層

№	色	緻密度	その他
1	7.5YR 3/ 3 暗褐色土	18	ローム粒子をごく少量含む。
2	7.5YR3.5/ 3 暗褐色～褐色土	19	ローム粒子・ロームブロックをまばらに含む。
3	7.5YR3.5/ 3 暗褐色～褐色土	18	ローム粒子・径10～50ミリのロームブロックを含む。
4	7.5YR 3/ 3 暗褐色土	15～18	5よりやや暗色。ローム粒子を少量含む。
5	7.5YR 3/ 3 暗褐色土	18～20	ローム粒子・ロームブロックを4より多く含む。



第12図 1 M溝跡出土遺物

第11表 1 M溝跡出土遺物観察表

No	出土地点	種類・器形	状態・部位	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	1 M東	土器・ 焙烙か	口縁部	復元口径 232 残存高 24	○細砂 ●橙色、淡橙色	内) 外) 横方向ナデ。	
2	1 M西	磁器・ 猪口	高台付底部	復元底径 33 残存高 20	○緻密 ●白色	内) 釉薬。 外) 釉薬、染付。	
3	1 M西	石鏃	完形	28.5 × 17, 厚さ 3.5 挟り 7	○チャート ●灰白色		

1 P土坑

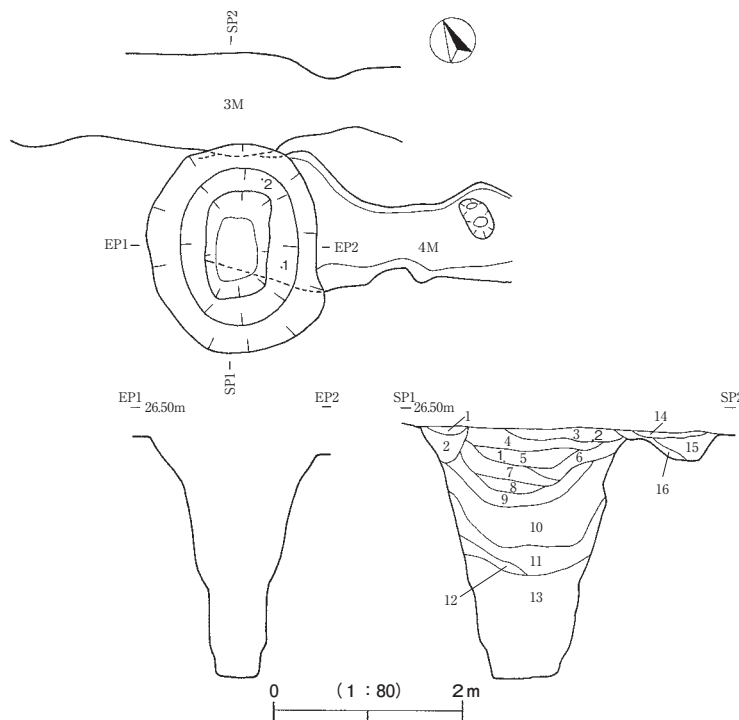
位置 2区の東部，1 M溝跡と2 M野馬堀の間の，野馬土手が存在したと考えられる地帯の，ほぼ中央に位置する。覆土1・2が示す小ピット，4 M溝跡，3 M溝跡に切られている。平面形態 楕円形。底面形態 隅丸長方形。規模 検出面：長軸方向2.2m × 短軸方向1.76m，底面：長軸方向0.65m × 短軸方向0.42m，深さ2.54m～2.63m。長軸方位 N-26°-E。中場以下の壁の掘り方が平滑で，コーナーが非常に角張って見えるのが特徴である。**覆土** 第13表のとおり。上層の4・5までは黒褐色土，6以下は褐色土主体となり，13などはしまりの弱い埋め戻し土と考えられる。出土遺物 陶器2点，磁器1点，土器1点，瓦2点，鉄滓2点，礫1点。磁器小壺の略完形品（第14図1）は，覆土5に当たるところに出土した。攪乱は認められず，本遺構の時期を考えるうえで参考になる。2 M野馬堀などと同様，瓦片が出土している。また鉄滓はh地点でも出土しており，合わせて当時の製鉄の存在を示すものであろうか。

考察 上面の平面規模が小さいが，深く垂直な壁などに陥穴状土坑との類似性を見る。野馬土手と重なる位置にあるため，まずは，土手の構築以前に既にあったものか，土手の削平後に掘られたものかのどちらかと考えるのが普通であろう。野馬土手構築以前の陥穴とすれば，縄文時代のものが最も多い事例となるが，コーナーが非常に角張っている形態は，縄文時代の遺構とは異なっている。また，覆土5に当たるところで19世紀代の磁器小壺が出土しており，攪乱が認められないことから，覆土上層とは言え，土手の下で完全に埋もれていたはずの穴の覆土に，19世紀代のこの遺物が入ることは説明困難である。では，土手削平後に掘られたものであろうか。m地点の西に隣接するe地点には，平成4年度まで大土手が残存しており，m地点にも残っていた可能性が高い。本遺構が平成4年以降に掘られたものとは考え難い。

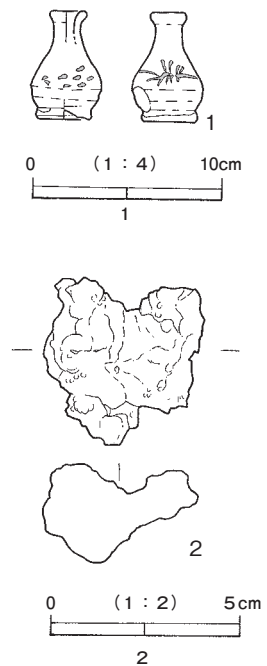
そうなると，本遺構は，野馬土手と同時存在していたという可能性が出てくることになる。本遺構と2 M野馬堀との間隔は2.4mであるから，ここの土手幅はそれ以下ということになる。あるいは，土手が途切れていたのかもしれないが確証はない。大土手の規模については，幅3m～4m（原・藤原1987年），高さ2.4m（八千代市遺跡調査会1999年）という記録がある。しかし，e地点の野馬土手の土層断面図を参考に，想像をたくましくすると，機能していた時の土手の幅は，より狭くより高かったのではないかと考えられる。その崩れた姿が前述の数値であろう。但し，これも確証はない。

近世の陥穴と言えはシシ穴・シシオトシが最も有名であるが、本遺構は、Tピット状の穴が列を成すシシ穴遺跡とは大きく異なる。本遺構は、土手の麓に接するように掘られた近世の陥穴状土坑で、土手と同時存在していた。幕末あるいは牧の使用が終わる頃、本遺構は、埋め戻されるなどして、深さ40cm程度の窪みとなっていた。そこに磁器の小壺が流入し、その後は自然堆積が進んだものと考えられる。

どのような理由で野馬土手の麓、しかも牧の外側に当たる方に陥穴を掘らねばならなかったのか。参考になる資料として、年月日は欠けているが、「下野牧付け村々里犬取締につき申上(状)」(大和田新田白井富美子家文書160)という文書があり、下野牧に犬が入り込み野馬に被害が出ているため、飼犬はつなぎとめ、野犬は処分するように周辺の野付村に命令が出ていたこと、村々は野犬の対処に苦慮していたことがわかる(八千代市史編さん委員会1994年)。里の犬を牧内に入れられないためには、牧の外で捕獲すべきであり、本遺構のようなものが掘られたかもしれない。また、寛政7年(1795年)の小金牧における鹿狩りを記録した『小金御狩記』に「五助木戸の脇には狼落し穴有之候。」とあり、「狼落し穴」の存在が知られる。これは、牧内に生息する狼を捕獲するためのものであろうか。野付村に課せられた仕事の中には、「野犬落とし穴浚い」があったという指摘もある(八千代市史編さん委員会2008年)。1P土坑のようなものが狼や野犬の落とし穴なのであろうか。当然、対象動物が落ちるような誘導施設があったであろうし、2P土坑の存在も気になるところである。いずれにせよ、高津新田野馬堀遺跡においては、初めての事例である。



第13図 1P土坑実測図



第14図 1P土坑出土遺物

第12表 1P土坑出土遺物観察表

No	出土地点	種類・器形	状態・部位	計測値(mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	1P-1	磁器小壺	略完形	口径19, 頸部径14, 胴部最大径37.5, 底径28, 高さ57.5	○緻密 ●白色	外) 染付。	19世紀代
2	1P一括	鉄滓	塊状か	42.5 × 44, 厚さ26	○錆状の塊 ●褐色		4M出土か。

第13表 m地点1P土坑土層

No	色	緻密度	その他	
1	7.5YR 3/2 黒褐色土	20	別遺構と考えられる。	ローム粒子ごくまばらに含む。
2	7.5YR 3/3 暗褐色土	17		ローム土まじり。ローム粒子まばらに含む。
3	7.5YR 3/3 暗褐色土	23	4M覆土	径1~2ミリのローム粒子を含む。 径2~5ミリの炭化粒子を多量含む。
4	7.5YR 3/2 黒褐色土	18	径1~5ミリのローム粒子を含む。	
5	7.5YR 3/2 黒褐色土	17	褐色土がにじむ。	
6	7.5YR 4/3 褐色土	18	ローム粒子を含む。	
7	7.5YR 4/3.5 褐色土	15	ローム土を主体とする。	
8	7.5YR 4/3 褐色土	16	ローム粒子を含む。6に似る。	
9	7.5YR 3/3主体、3/2まじる 暗褐色土主体、黒褐色土まじる	15	ローム粒子を含む。	
10	7.5YR 4/3 褐色土	10~15	ローム粒子を含む。	
11	7.5YR 4/3・4/4 褐色土	10~16	ローム土を主体とする。	
12	7.5YR 3/3・3/2 暗褐色土・黒褐色土	13	ローム粒子を多量含む。	
13	7.5YR 4/3・4/4 褐色土	4~8	ローム土を主体とする。ロームブロックを含む。	
14	7.5YR 4/4・4/3 褐色土	23	3M覆土	ローム土・ロームブロック・暗褐色土の混じり合った土がつき固められている。
15	7.5YR 4/4・4/3 褐色土	23		14に似るが、ロームブロックが50~80ミリと大きくなる。
16	7.5YR 3/3・4/3・4/4 暗褐色土・褐色土	20~23		14・15に似るが、暗褐色土が主体。

2P土坑

位置 第8図参照。2区の西端，1M溝跡と2M野馬堀の間の，野馬土手が存在したと考えられる地帯の北寄りに位置する。調査区端部のため全掘できなかった。平面形態 不明。規模 長軸：残存2.06m，短軸：残存0.44m，深さ：残存で地表下1.0m。覆土 第7表のとおり。覆土上層の1（黒褐色土）は，4M溝跡の覆土と捉えた土6に切られるようである。その点は，1P土坑と共通する。出土遺物 なし。

考察 1P土坑と同様，野馬土手との関係に興味を持たれる。1P土坑と異なり，北に寄っているので，2M野馬堀との間隔は3.0m以上ある。本遺構も1P土坑と同様の性格だとすると，野馬土手に沿って陥穴状土坑が並ぶという状況になるが，その可能性があるという指摘のみに留めたい。

野馬土手の痕跡

位置 かつて市道八千代台南42号線沿いには，大小の二重の野馬土手が存在していた。南側が低く小さな土手，北側が高く大きい土手であった。明瞭な痕跡ではないが，2区の南部，1M溝跡と2M野馬堀の間の地帯が，北側の大規模な土手のあったところである。規模 1M溝跡と2M野馬堀の間の距離は6.7m~7.3mである。この中に4M溝跡とした近代以降の溝跡があり，その付近から南側の幅3mほどの地帯は攪乱が無く，北側の攪乱地帯と対照的である。覆土 第8図の土層断面に，2M野馬堀と2P土坑間の土層を示した。ここが大土手の基盤に当たると考えられ，II a層としたしまりのよい黒褐色土が見られる。考察 残存していた当時の大土手の規模は，幅3m~5mであったようであるが，e地点での土層調査から見て，土手の上部が崩れてその規模に見えていたのであり，元は，より狭かったと推定される。従って，2M野馬堀と4M溝跡間の攪乱のない幅3m以内の地帯が，大土手の実際にあったところなのではないかと考えられる。

e地点の土手の土層断面にも，土手の基底によくしまっている黒色土（II層）があり，旧地表を整地・版築した基礎部分と捉えている。今回のII a層は，e地点のII層に相当すると考えられ，これをもって土手の痕跡と捉えたい。

3 M溝跡

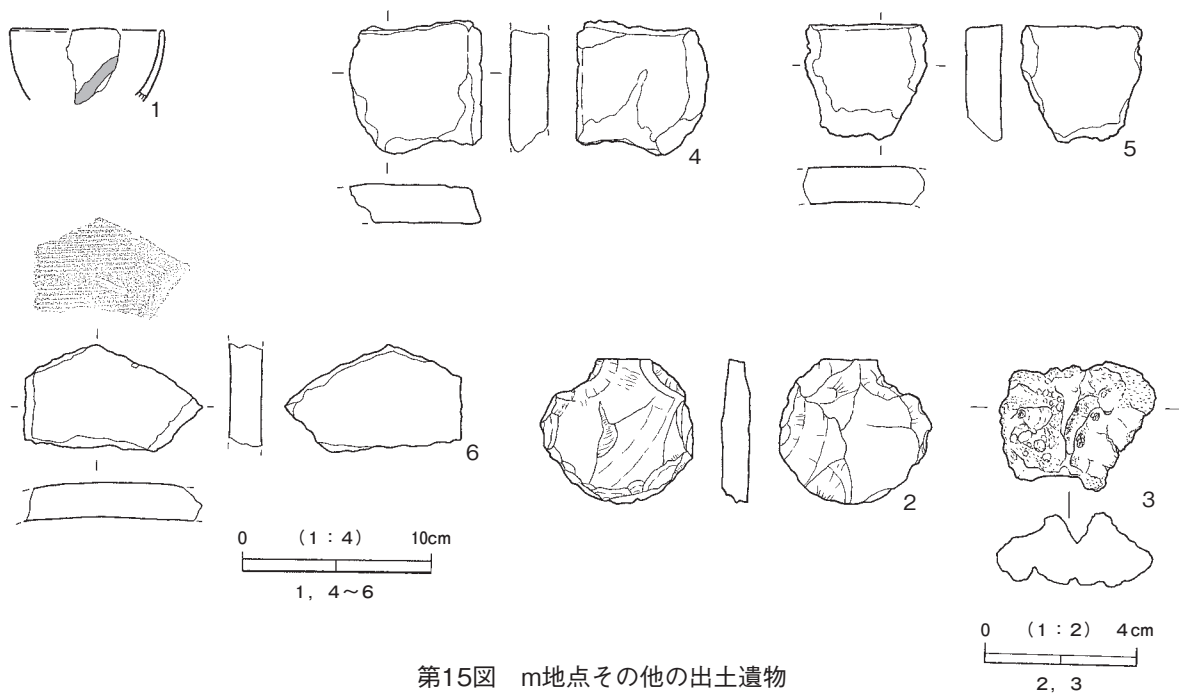
位置 第5図・第13図参照。1 P土坑・4 M溝跡の各一部を切っている。覆土 第13表14～16のとおり。しまりの非常に強い、ローム・ロームブロックまじりの土であった。出土遺物 瓦1点。
 考察 溝跡としたが、コンクリート片が出土するなど、ごく新しい時代の攪乱と判断した。

4 M溝跡

位置 第5図・第13図参照。1 P土坑の覆土上層を切って東西方向に、断続的に続く溝跡と判断した。1 P土坑から3.6m～6.7mの地点に染み状に見えており、さらに調査区西端の2 P土坑土層断面にこれに対応するような土層も見えている（第8図22の土）。規模 1 P土坑土層断面では、残存幅1.2m、深さ10cm～15cm、底面標高26.14m。染み状に見える地点では、残存長3.06m、幅15cm～24cm、深さ5.0cm、底面標高26.253m～26.289m。2 P土坑土層断面では、幅0.86m、深さ17cm、底面標高26.4mである。覆土 第7表22・第13表3のとおり。

出土遺物 陶器1点、磁器1点、瓦4点、円板状石製品1点、鉄滓1点、礫1点。

考察 3 Mよりは古いが、1 P土坑・2 P土坑が埋まりきってから掘られたものである。野馬土手の麓を壊すように掘られたものと見られ、その在り方は、2 P土坑土層断面図がわかりやすい。近～現代のものと判断した。



第15図 m地点その他の出土遺物

第14表 m地点その他の出土遺物観察表

No	出土地点	種類・器形	状態・部位	計測値 (mm)	○胎土/石材 ●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	4 M一括	陶器 壺	口縁～ 体下部	復元口径 82, 残存高 38	○緻密 ●(内) 外) 灰白色	内) 外) 施釉。 外) 染付。	
2	4 M一括	礫		40 × 38, 厚さ 7	○滑石か ●灰黒色	円形に整形されたものか。	
3	4 M一括	鉄滓	多孔質, 亀裂あり	41 × 34, 厚さ 19	○粘土が焼けた部分とアスファルト状の部分がある。粘土部には粗砂含む ●灰色(粘土部)～黒灰色～黒色(アスファルト部)	粘土部：平滑な部分がある。 アスファルト部：多孔質。	製鉄炉壁の一部か
4	4 M一括	平瓦 素焼瓦	端部	71 × 70, 厚さ 20	○赤褐色粒子 ●淡褐色	平滑。	
5	4 M一括	平瓦 いぶし瓦	端部	64 × 61, 厚さ 19	○赤褐色粒子, 細砂 ●黒灰色, 灰色	銀色は不明瞭。	
6	廃土一括	平瓦 いぶし瓦	破片	94 × 56.5, 厚さ 18 ~ 19	○細砂 ●黒灰色, 黒色, 灰色	銀色は不明瞭。 片面に条線状の滑り止めが施される。	

第3章 成果と課題

1 高津新田遺跡 e 地点

(1) 土坑 1 基を調査した。形態は不整形で、覆土に微量の焼土が含まれた。遺物は伴わなかった。過去の調査事例から、縄文時代（早期・前期・後期のいずれか）のものだと判断した。

(2) 表土から、近世～近代と考えられるすり鉢破片を採集した。

(3) 本遺跡では、a 地点において縄文時代早期撚糸文期の竪穴建物跡 1 棟が検出され、その広がりには注意してきたところであるが、その後の b～d 地点及び今回の e 地点においても当該期の遺物は検出されなかった。

2 高津新田野馬堀遺跡 m 地点

(1) 野馬堀 1 条（2 M 野馬堀）を調査した。市道八千代台南 42 号線に沿って、幅 2.7m、長さ 11.3m のプランを検出した。

(2) 野馬堀の形態は、短軸断面逆台形で、計測値は、上端幅が残存 2.6m～2.7m、中段幅 1.95m～1.97m、底面幅 1.0m～1.06m、深さは検出面下 2.28m～2.3m、底面標高は 24.06m～24.20m であった。

(3) 野馬堀の出土遺物は 5 点のうち 4 点は瓦である。瓦は平瓦 3 点と有段式丸瓦 1 点であった。

(4) 野馬堀 A 区の覆土に、掘り返しを行ったような土層を認めた。

(5) 野馬堀の北側、攪乱の無い幅 3 m ほどの地帯に土手があったと推定した。西端の土層断面で、土手の基盤と考えられる黒褐色土を認めた。

(6) 深く垂直な壁の土坑 1 基（1 P 土坑）を検出、調査した。形態から陥穴の機能をもつものと判断した。検出面 2.2m×1.76m の楕円形、底面 0.65m×0.42m の隅丸長方形、深さ 2.54m～2.63m。覆土上層から 19 世紀代の磁器小壺略完形品が出土した。野馬土手に接するように掘られたもので、土手と併存していたと考えた。野馬の害獣である野犬を捕えるための落とし穴であろうか。

(7) 野馬堀から 6.7m～7.3m 北の位置に溝跡 1 条（1 M 溝跡）を検出、調査した。牧の外側にあつて、野馬土手・野馬堀に平行して断続的に見られる溝である。

(8) 調査区西端に土坑の一部を検出した（2 P 土坑）。1 P 土坑と同じ機能を持つものかどうかは不明である。

(9) 1 M 溝跡から石鏃 1 点が出土した。高津新田遺跡の調査成果と合わせ、縄文時代における土地利用を考える上で参考となる資料である。

図版1 高津新田遺跡e地点・高津新田野馬堀遺跡m地点



(1) e地点調査状況



(2) e地点1P土坑検出状況



(3) e地点1P土坑土層断面



(4) e地点1P土坑完掘状況



(5) m地点調査前状況



(6) m地点2M野馬堀検出状況



(7) m地点2M野馬堀A区土層



(8) m地点2M野馬堀A区完掘状況

図版2 高津新田野馬堀遺跡m地点



(1) 2M野馬堀B区完掘状況



(2) 1M溝跡土層断面—1—



(3) 1M溝跡土層断面—2—



(4) 1M溝跡完掘状況



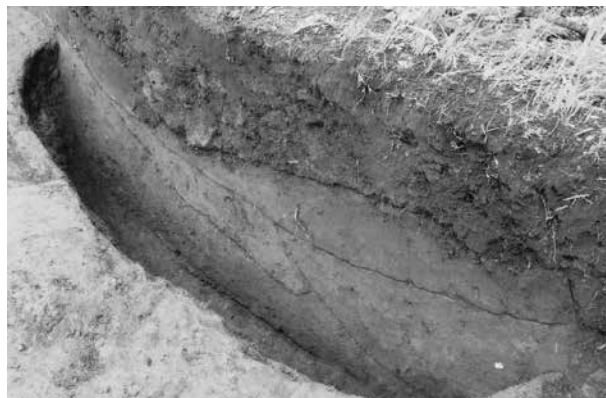
(5) 1P土坑土層断面



(6) 1P土坑完掘状況—1—



(7) 1P土坑完掘状況—2—



(8) 2P土坑土層断面

図版3 高津新田野馬堀遺跡m地点・出土遺物



(1) 2M野馬堀A区～2P土坑間土層断面



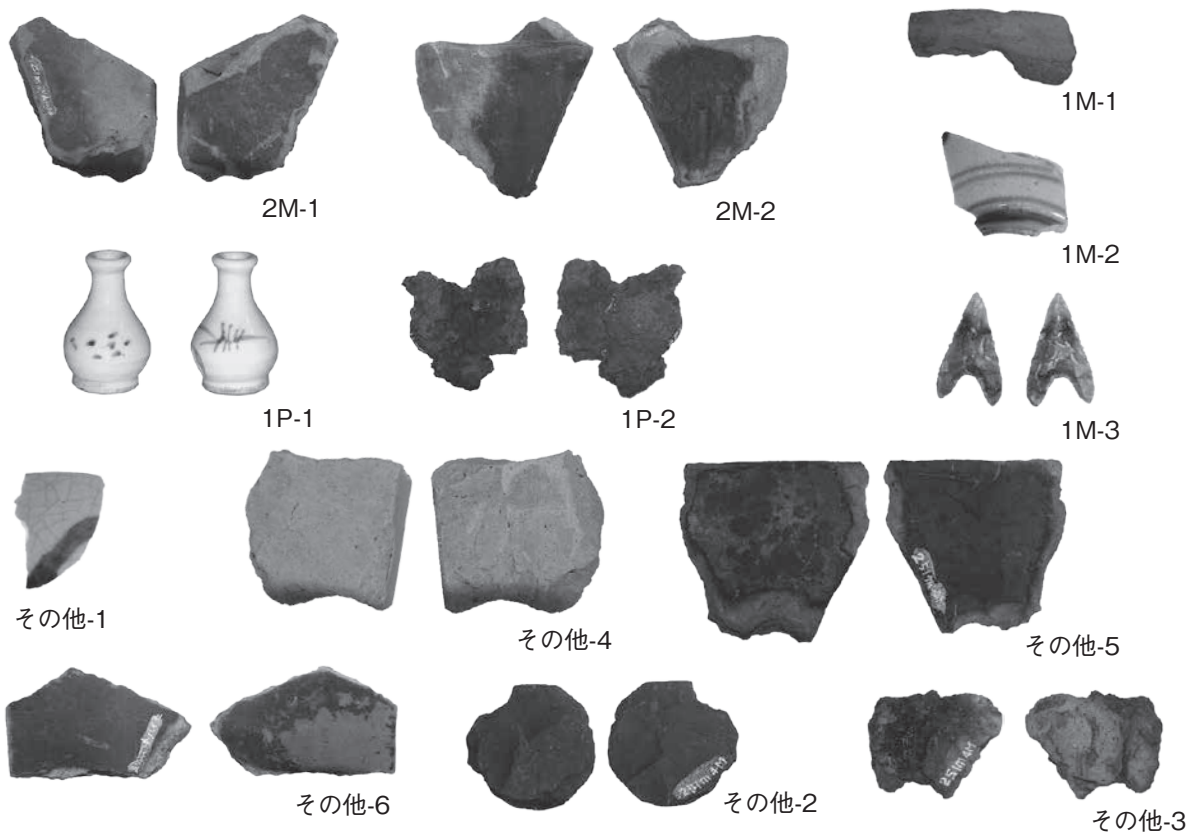
(2) 4M溝跡と1P土坑



(3) 4M溝跡



(4) m地点全景



(5) m地点出土遺物 (番号は図の番号に一致)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばげんやちよし たかつしんでんいせきいーちてん・たかつしんでんのまぼりいせきえむちてん							
書名	千葉県八千代市高津新田遺跡 e 地点・高津新田野馬堀遺跡 m 地点							
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	常松成人							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138番地 2 TEL 047 (483) 1151代表							
発行年月日	平成28年 1月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
たかつしんでんいせき ちてん 高津新田遺跡 e 地点	やちよだいまみなみにちようめ ばん 八千代台南二丁目1番77, ばん 18番1, 19番	12221	250	35度 41分 50秒	140度 5分 27秒	20150623 ～ 20150716	上層285 ／1,231.36	宅地造成
たかつしんでんのまぼりいせき 高津新田野馬堀遺跡 ちてん m地点		12221	251	35度 41分 44秒	140度 5分 27秒			

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高津新田遺跡 e 地点	包蔵地	縄文時代	縄文時代土坑1基	なし	
高津新田野馬堀遺跡 m 地点	牧	近世	近世 野馬堀1条, 溝跡1条, 陥穴1基, 土坑1基	近世・近代陶磁器, 土器, 瓦, 縄文時代石鏃	
要 約	<p>高津新田遺跡 e 地点 土坑1基を検出し, 調査した。遺物は無かったが, 周辺の調査状況等から, 縄文時代のものと判断した。</p> <p>高津新田野馬堀遺跡 m 地点 近世の下野牧に伴う野馬堀1条を検出し, 調査した。 野馬堀の北側, 攪乱の無い幅3mほどの地帯に土手があったと推定した。西端の土層断面で, 土手の基盤と考えられる黒褐色土を認めた。</p> <p>深く垂直な壁の土坑1基(1P土坑)を検出, 調査した。形態から陥穴の機能をもつものと判断した。覆土上層から19世紀代の磁器小壺略完形品が出土した。野馬土手に接するように掘られたもので, 土手と併存していたと考えた。野馬の害獣である野犬を捕えるための落とし穴であろうか。</p> <p>野馬堀から6.7m～7.3m北の位置に溝跡1条(1M溝跡)を検出, 調査した。牧の外側にあって, 野馬土手・野馬堀に平行して断続的に見られる溝である。</p> <p>調査区西端に土坑の一部を検出した(2P土坑)。1P土坑と同じ機能を持つものかどうかは不明である。</p> <p>1M溝跡から石鏃1点が出土した。高津新田遺跡の調査成果と合わせ, 縄文時代における土地利用を考える上で参考となる資料である。</p>				

千葉県八千代市
高津新田遺跡 e 地点・
高津新田野馬堀遺跡 m 地点
— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

発行日	平成 28 年 1 月 20 日
編集	八千代市教育委員会 教育総務課 〒 276-0045 八千代市大和田 138-2 TEL 047-483-1151
発行	内田正勝・株式会社アーネストワン
印刷	金子印刷企画
